災害避難 介助者頼み

自力で動けぬ難病患者や重度障害者

九州豪雨の被災者の中には、体が不自由な人もいる。大分県日田市の平川明美さん(56)の次女、夏生(なつき)さん(24)もその一人。豪雨が降り始めた当日は普段から利用する施設にいて難を逃れたが、今も自宅が浸水して戻れず、避難先のアパートで不慣れな暮らしを送る。難病患者や重い障害者の避難は身近な介助者頼みの側面が強く、当事者や支援者は不安を抱えている。【1面参照】

「助かって良かった」。平川明美さん(右)は次女夏生さんの無事をかみしめる＝20日、大分県日田市

―― 九州豪雨 ――

自宅が床上浸水 日田の平川さん

「もし家にいたら…」

「たまたま助かったわね、本当に」。知り合いが無償提供してくれたアパートで、明美さんは車椅子に乗る娘に話し掛けた。夏生さんはここ数日、ようやく食欲が戻ってきたという。

夏生さんは痛みの感覚がなく、汗による体温調整ができない難病「先天性無痛無汗症」を患う。4年前、感染症に伴って全身が炎症状態となり、自力で動いたり食事をしたりすることが難しく、全介助となった。

豪雨に見舞われた5日夕、夏生さんは行きつけの障害者支援施設にいた。そのまま避難生活に入った。環境の変化に敏感で、ベッドのスペースも確保しづらく、一般避難所は考えられなかった。施設で1週間過ごした後、両親、祖父母とともに今のアパートに移ったが、いつまでも知人の善意に頼り続けるのは「気が引ける」と明美さん。とはいえ自宅は床上約1メートルまで浸水し、行き場はない。

日田は全国有数の酷暑で知られ、夏生さんは40度近い発熱が珍しくない。明美さんは「今回は施設にいて助かったけど、もし家にいたり、娘を車椅子に乗せて外出中だったりしたら…」。夏生さんと車椅子を合わせて60キロ超。自らの体の衰えも感じるだけに、娘を抱えて逃げる自信はない。

国は市町村に対し、高齢者や障害者など一人一人の要支援者について、災害時に誰がどこに避難させるかなどの「個別計画」を定めるよう促している。ただ日田市の場合、要支援者7144人のうち策定済みは2041人。夏生さんは含まれていない。「何か起きたとき、どこに行けばいいのか」。雨が降るたび、明美さんの不安は一層、募る。

一方、在宅の重い障害者向けの短期入所を行う福岡県久留米市田主丸町の社会福祉法人ゆうかり学園は今回、同県朝倉市などに住む3人の避難を受け入れた。

豪雨の翌6日、担当者がそれぞれ電話連絡すると3人が施設への避難を希望したため、職員が自宅近くまで車で迎えに行ったという。いずれも寝たきりで、たんの吸引などの医療的ケアが必要。うち1人は自宅の被害がひどく、今も施設で過ごす。

医療的ケアは原則、医師や看護師しかできないため「通常の避難所でのケアは難しい」と担当者。「日頃から介護者の負担軽減目的で預かっていたから今回は対応できたが、利用が初めての人には保護者にケアをしてもらう必要がある。対象者が増えれば、受け入れは限定的にならざるを得ない」と悩ましげに話した。

（森亮輔、川口安子）

周知進む「福祉避難所」

障害者対応 なお課題

市町村は災害時、配慮が必要な高齢者や障害者を受け入れる「福祉避難所」を開設することができる。事前に協定を結んだり指定したりした福祉施設や公的施設が対象となる。

今回の九州豪雨で大分県日田市は、7月10日までに特別養護老人ホームやグループホームの3施設を福祉避難所とし、認知症など高齢者4人が身を寄せた。

「熊本地震の教訓を生かし、スムーズに対応できた」と担当者。昨年8月、福祉施設の事業者向けに福祉避難所の対象者や開設の流れなどを示すマニュアルを策定。熊本地震では福祉避難所の周知不足が指摘されたため、事業者にも広く知らせていたという。

一方で、障害者施設の福祉避難所は「被災者が普段利用している施設が受け入れるなどして無事だった」などとして開設しなかった。市が協定を結ぶ31施設中、障害者施設は4施設のみ。市は今後、対応可能な事業者を増やしていく考えだが、日中の通所施設が多く、夜間対応が必要な避難所の役割を果たしにくいのが実情だ。

福岡県朝倉市や同県東峰村は、保健師などが避難所を巡回した結果、「居間の助けがあったり、既存の介護・福祉サービスで対応されていたりした」として、福祉避難所は開設していない。

（森亮輔）